月刊みんぱく

2021年
7月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和3年7月1日発行 第45巻第7号通巻526号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

特集 民話のちから

現代に生きる民話 竹原 新

アフリカの民話を集める 和田 正平

ネパールの暮らしと民話 工藤 さくら

ミンブレス土器を民話で解く 伊藤 敦規

月刊みんぱく
2021年
7月号

目次

1 エッセイ　千字文
昔話と昔話の絵本
小宮 由

特集
民話のちから

2 **現代に生きる民話**
竹原 新

4 **アフリカの民話を集める**
和田 正平

6 **ネパールの暮らしと民話**
工藤 さくら

8 **ミンブレス土器を民話で解く**
伊藤 敦規

10 みんぱく回遊
展示にないものを展示にみる
――バルカン半島の文化を探る
上畑 史

12 みんぱくインフォメーション

14 ○○してみました世界のフィールド
ムンバイのムスリム聖者廟
真下 裕之

16 世界のバスケタリー×バスケタリーの世界
バスケタリーをはぐくむ村落景観
小坂 康之

18 シネ倶楽部 M
映画の好みも多様なインド
――「ピンク」「ネールコンダ・パールヴァイ」
山下 博司
岡光 信子

20 ことばの迷い道
「ご健勝を」のキャッチボール
樫永 真佐夫

21 編集後記・次号の予告

表紙
エド・カボーティ画
《A Tewa Migration Story》（部分） 2019年
ミンブレス土器の意匠を読解して描いたペン画。
カーポ・オウィンゲの民話の一場面（H0326404）

エッセイ 千字文

昔話と昔話の絵本

小宮（こみや） 由（ゆう）

私は子どもの本の翻訳を仕事にしていて、これまで一〇〇冊以上の本を訳出してきたが、その中に外国の昔話の絵本がある。フランスの昔話の『せかいいちおいしいスープ』（岩波書店）、インドの昔話の『あおいジャッカル』（瑞雲舎）、ロシアの昔話の『まることごくり！』（大日本図書）などだ。

昔話は口承文芸であるから、本来、そのお話には挿絵がない。挿絵がなくても、聴くだけで内容がわかるようになっているのが、昔話の特徴の一つだ。それはすなわち、話が途中で前後したり、複雑な伏線が張ってあったり、一人称の視点で語られていたりといった、小説などに用いられる技法は使われていないということである。

もし、昔話を上記のような技法を用いて語ってしまうと、話が煩雑になってしまい、聴き手は（それは特に子どもの場合が多いのだから）物語の筋を見失ってしまう。そのため、昔話の展開は、始まりから終わりまで、どれも直線的、且つ段階的になっている。

さらに昔話というのは、あらゆることが簡素化、単純化されている。例えば固有名詞をもった登場人物は、ほぼ主人公のみで、それ以外は、おじいさん、おばあさんなどの普通名詞であることが多い。また「うれしかった」「苦しかった」などの心理描写は排除され、そこは聞き手の心に委ねられている。これらの事象は、そのお話が、今日まで伝わってきた中で、何世代のもの語り手たちによって、洗練されてきた証しなのだ。

話は戻って、私の翻訳した昔話の絵本、つまり昔話に挿絵をつけた本というのは、どういうものなのか。前述の通り、もともと必要のないものを付け足しているのだから、よほど気をつけなければならない代物だ。これまで、聴き手がお話を聴きながら、頭の中で想像していた映像を、画家の挿絵に切り替える（固定する）わけだから、すべてが画家の技量次第となる。画家がそのお話の核心をつかみ、描くものと、そぎ落とすものを正しく判別し、表現しなければならないからだ。

故に本来なら、昔話は素話（ストーリーテリング）で親しむのが理想なのだが、語り手が減っている現代において、子どもが昔話にふれるのに、絵本がひとつの選択肢になっていることは間違いない。そのため私は、常に質の高い海外の昔話の絵本を探している。なぜなら、昔話は、あらゆる「文学」の源泉なのだから。

プロフィール
1974年東京都生まれ。翻訳家。児童書版元等に勤務後、留学を経てフリーになる。2004年より、東京・阿佐ヶ谷で家庭文庫「このあの文庫」を主宰。実家は熊本・西原村で児童書専門店「竹とんぼ」を経営。祖父はトルストイ文学の翻訳家で良心的兵役拒否者である、故・北御門二郎。おもな訳書に『さかさ町』（岩波書店）、『しょうぼうしのくまさん』（福音館書店）、『イワンの馬鹿』（アノニマ・スタジオ）など多数。

特集 民話のちから

昨今、民話はアニメなどに取って代わられ、語られる機会は減りつつあるように見える。しかし、その世界を掘り起こしてみると、民話にはさまざまな種類があり、その「ちから」も多方面におよんでいるようだ。本特集では、民話をとおして、人から人へ語り継ぐことの重要性を考えてみたい。

現代に生きる民話

竹原新（たけはらしん）　大阪大学教授

「もしも一度だけ魔法が使えたら？」

何を非科学的なことを言っているのだ。学術機関の広報誌ですぞ。というお叱りを受けそうだが、民話研究者は、わりと日々このようなことばかり考えていると思う。

民話の定義

民話ということばは何気なく使われることが多いが、民間説話の略語であり、人びとのあいだで、口頭で語られるストーリー性のある話を総称したものである。また、民話というとグリム童話の「白雪姫」や「シンデレラ」、あるいは、我が国の「こぶとりじいさん」や「猿かに合戦」などを思い浮かべる方が多いと思うが、学術的には、これらの話は、普通は昔話に分類される。少しややこしいのだが、民話のなかに昔話、伝説、世間話が含まれるとされるので、これらの話は昔話であると同時に民話でもある。

伝説というのは、史実かどうかはさておき、蛇が財宝を守るというイランの丘の伝説のように人が特定されるか、聖者伝説のように場所が特定されるか、「江戸時代の話だが……」というように時が特定される話を指す。世間話とは「あの家のご夫婦、また大喧嘩したらしいよ」といった類いの世間話ではなく、いわゆる都市伝説もしくは現代伝説のことを指す。つまり、「トイレの花子さん」や「口裂け女」の話も民話なのである。

わたしもかつては多くの誤解や用語の混同をしていたのであまり偉そうなことは言えないが、一応、民話にもこういった定義があることを示しておく。

昔話の衰退と世間話の発展

さて、本稿の依頼内容は、失われゆく民話がもつ力に迫る総論を書くようにというものであった。たしかに、近年、日本のみならず世界中において、口頭による昔話の伝承が衰退傾向にあることは否めない。わたしが専門とするイランでもその傾向は顕著である。しかし、あらゆる民俗事象が衰退傾向にあるかといわれるとそういうわけではなく、例えば、多くの日本人は祭りの季節になると大人も子どもウキウキしだすものだが、このような現象を見ると、各種の祭りはこれからも多くの地域で継承されていくのだろうと思う。イランでも、年に一度おこなわれるアーシューラーの祭りは国を挙げての一大イベントとなる。

アーシューラーの儀礼の行列。アーシューラーの儀礼とは、イスラム暦モハッラム（ムハッラム）月10日におこなわれる宗教行事。宗教演劇や行列の巡行が実施されたり、食事が振る舞われたりするなど、地域住民が交流する行事ともなっており、年に1度の祭りとしての性格が濃い（ターレバーバード、2018年）

鳥占いのインコたち。多くはくちばしで紙の束から1枚だけを取り出すようにしつけてあり、紙には詩人ハーフェズの詩が書かれている。人びとはインコが選んだ紙をもらい、そこに書かれた詩を解釈することで運勢を占う（テヘラン州、シャー・アブドル・アズィーム廟付近、2016年）

また、日本人は怪談や都市伝説が大好きで、特に夏になるとテレビや雑誌でよく特集が組まれる。都市伝説が大好きなのはイラン人も同様で、昔話の採録は近年難しくなってきたと感じるが、都市伝説はいくらでも採録できる状況にある。同様に、民話ではないが呪術や占いも十分残っている。このように、昔話は衰退しているが、民話あるいは民俗全体で見ると、必ずしも衰退しているわけではないのである。

モチーフ、エピソード、話型のもつ力

わたしは民話という形式にはそんなに「力」があるとは思っていない。しかし、民話のモチーフ、エピソード、話型には「力」があると考えている。先に述べたとおり、近年、昔話の伝承は衰退傾向にあるが、それは映像技術の発達や識字率の向上により、映像や文字を介してストーリーを伝達できるようになったことが大きい。昔話に含まれていたモチーフ、エピソード、話型は、アニメ、ゲーム、コミック、ドラマ、映画、ライトノベルといった新しいジャンルの文化にも多く見られる。現代カルチャーでも、異世界転移、魔法、呪術、鬼、モンスターなどは大人気であるが、これらは、かつては昔話の得意分野であったはずである。民話はいわばヤドカリの殻のようなものであり、本体は次々と殻をかえて生き続ける。殻のひとつに民話や現代カルチャーが含まれると考えるとわかりやすいだろう。

もしもわたしに一度だけ魔法が使えるのなら、その魔法を無限に使えるようにする……というのはナシとして、「魔法、異世界、鬼などが存在するかもしれない」という意識を、未来永劫（みらいえいごう）、世界中の人びとの心に植えつけてみたい。いや、わたしがやらなくても、現在の状況を鑑みるに、すでに過去の誰かが同じ魔法をかけたのかもしれない。

ターレバーバードの遺跡の蛇と財宝

とても古い時代、ターレバーバードがまだ別の名前だったころ、後にはつぶれたが、大きな城壁があった。地震か台風かで丘のようになったと言い伝えられている。この土の丘のなかには、財宝があるという。とてつもない量の財宝で、その価値も計り知れなく、金貨や金などの財宝であるという。その上には龍か蛇が座っていて、誰かが探したり、その土の丘のなかに入ったりしたときのために、その財宝を守っているという。そういうわけで、長年、丘のなかに置かれたままになっていて、誰もそのなかに入って、その財宝、金などを取り出そうとする者はいないのである。

（ターレバーバードにて25歳男性より採録、1998年）

蛇が財宝を守るという伝説のある丘の一部（イラン、テヘラン州、ターレバーバード、2015年）

アフリカの民話を集める

和田 正平　民博 名誉教授

わたしが初めてアフリカ大陸に足を踏み入れたのは、一九六四年九月、あの東京オリンピックが開幕する直前だった。同輩の日野舜也とともに、今西錦司率いる京都大学アフリカ学術調査隊に参加し、ケニアの首都ナイロビに降り立った。当時のケニアは英国から独立したばかりで、まだ植民地的雰囲気が行政機関を支配していた。日本もオットマンバンク二階に領事館を設置していただけで、学問的な調査に関する情報は乏しかった。

そんな時代だったが、京都大学では一九五三年から類人猿（ゴリラ）の調査を開始していて、独自に新しい情報を蓄積しつつあった。さらに、人類発祥の地としてのアフリカ調査にも着手し、一九六一年には人類班を結成した。タンザニア北部、エヤシ湖のほとりに調査基地を設営し、富川盛道（当時北海道大学助手）と富田浩造（当時北海道大学大学院生）の両氏が狩猟採集民、牧畜民の調査を開始した。一九六三年には梅棹忠夫民博初代館長（当時大阪市立大学助教授）も参加した。

乾季で刈り取られた畑のなかに見えるタンベルマの城（トーゴ、1978年）

ハディシの家

当時、北海道大学の研究生だったわたしは、この人類班調査を引き継ぐ形でタンザニアに入った。対象はハナン山麓に住む半農半牧民、イラク族だった。調査にあたって今西隊長のことばを思い出した。「英語なんかで調査するな。スワヒリ語とイラク語で調査してこい」。

そこでまず、ナイロビから一泊二日、ランドローバーを走らせ、イラクの村に到着した。村長にあいさつに行くと、「お前は何をしにここに来た」と問われた。わたしは咄嗟に「イラクのハディシを集めに来た」とはスワヒリ語で昔話、伝説、物語、歴史、言説、民謡、世間話等を指している。これは一言でいうと、「民話」のことだ。それなら協力しようということになり、無事に村入りを果たし、ハナン山（三四一八メートル）の谷川のほとりに家を建てることにした。ただし、これは樵から始めなければならない難事業で、途中からわたしの調査に参加した福井勝義（当時京都大学学生）の協力なくしては完成しなかっただろう。

その後、家が完成し、新築祝いが終わると、連日、村人との交流が始まった。毎晩、長老（ムゼイ）たちと酒を酌み交わす仲になり、興にのると、ともに神に祈ったり、手をたたいて歌ったりするようになった。夕方、石油ランプが灯ると、我が家は「ハディシの家」になり、すべての歌や会話をテープに採録する作業が始まった。翌日は、その録音テープを再生して、イラク語の語り等を文字化した後、スワヒリ語訳をつけていった。

左がジャパニ（ハディシ）の家。後方に見えるのがハナン山（タンザニア、ギティン村、1960年代）

ゲスーダ（ハチミツ酒）を飲むために集まっているイラク族の長老たち（タンザニア、ギティン村、1960年代）

ハディシの家の居間でテープレコーダーを聞く近隣の青年（タンザニア、ギティン村、1965年）

しかし、すべての語りがイラク族に特有の伝承かどうかは検討する必要があった。ハディシは伝播するからだ。こうした整理・分析を始めると意外に時間がかかる。結局、採録した九十数編の内、四六編を『イラクの口頭伝承』として整理し、一九七六年、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所から学術出版した。しかし、これはスワヒリ語ということもあり、読者層は極めて限定的なので、この本を底本として、一部民話の入れ替えと追加をおこない、日本語版として一九八三年二月、単行本『イラクの昔話』（同朋舎出版）を出版した。

アフリカの民話を日本へ

ところで、わたしが口頭伝承の記録を始めたころ、エチオピアで昔話を採集していた人がいる。その人物、山口昌男は一九七一年に『アフリカの神話的世界』（岩波書店）を出版し、トリックスターの昔話を紹介している。

『イラクの昔話』でも、ウサギはトリックスターで、徹底したいたずら者として登場する。ウサギにひどい目に遭わされるのは、毎夜、我がハディシの家にもやってきたハイエナである。こうした動物は人間になぞらえられ、例えば「お前はウサギのような奴だ」と人間関係にも用いられることがある。そんな「民話のちから」を一般に広く知らしめたアフリカニストがいる。江口一久だ。わたしの後輩だが、このジャンルでは先輩だ。研究成果の一部は『北部カメルーン・フルベ族の民間説話集』全五巻（松香堂、一九九六～二〇〇〇年）として刊行された。また、子ども向けに『おはなし村――西アフリカから』（保育社、一九九六年）を出版し、二〇〇三年七～一一月には同名の特別展を民博で開催、民話のおもしろさをアフリカの展示造形物のなかで語り伝えたのである。

わたしの方はタンザニア調査に区切りをつけ、調査範囲を西アフリカのトーゴにまで展開し、アタコラ山脈の奥地に向かった。調査にあたり、裸族だったタンベルマ族の村入りをサポートしてくれたのが江口だった。

このときに記録した口頭伝承は、整理・分析にかなり時間を要したが、なんとか『お話は土の城のテラスで』（メディアイランド、二〇一六年）として上梓することができた。この本の献辞を江口一久に捧げたわたしの気持ちがおわかりいただければ幸甚です。なお文中で言及したアフリカニストたちはすべて故人になったことを付記しておきたい。

椅子の上に機具を置いて記録をつける江口と、それを見つめる男の子たち（トーゴ、ワルテマ村、1984年）

ネパールの暮らしと民話

工藤 さくら
民博 外来研究員

ネパールには、多様な民族や文化が混在する。今回はそのなかでも、カトマンドゥ盆地の先住民であるネワールの人びとの民話を紹介したい。

民話の想像力

「ドーンチョーレェチャ」という民話がある。ドーンチョーレェチャとはふたつの動物の頭をもつ雌ヤギのことで、ドーンはキツネ、チョーレェはヤギを意味する。日本では、大塚勇三再話・秋野亥左牟画の絵本『プンク マインチャ』（「プンク少女」の意味、福音館書店、一九九二年。初版は『こどものとも』一四三号、一九六八年）で知られている。現地では演劇化されるほど知られた物語である。この雌ヤギは賢く慈愛に満ちており、継母にいじめられている主人公のプンクをいつも慰める。プンクにとって唯一の理解者であり、家族のような存在である。さらにこの雌ヤギは、食べ物を生み出す不思議な力をもっていた。

ある日、お腹を空かせたプンクはこっそりドーンチョーレェチャのいる野原に行き、ご飯と豆のスープをもらって食べていた。しかし、それを義妹に見られてしまい、しつこく問い詰められた挙げ句、雌ヤギの秘密を話してしまう。継母は嫉妬し、雌ヤギを屠ることに決めるが、それを悟った雌ヤギは、プンクにこのようなことを告げる。「明日、わたしは殺される。宴会料理にわたしの肉が入っていても決して食べてはならない。みんながが食べ終わった後にわたしの骨をすべて集めて、野原に埋めなさい」。あくる日、雌ヤギは生け贄として神に捧げられ、直会用の宴会料理として調理されてしまうが、プンクは言われたとおり、すべての骨を集めて土に埋めた。すると数日後、そこに大きな木が生え、ヨマリの実がたくさんなった。

ヨマリとは、ネワールの言語でイチジクの実を意味している。しかし、絵本や挿絵には果実ではなく、菓子のヨマリが描かれる。後者のヨマリは、糖蜜と胡麻を混ぜたあんを米粉の生地で包んで蒸した団子である。さまざまな謂れがあるが、yah（美味しい）mari（菓子）という発音に近いことから、果実ではなく菓子が描かれるようになったようだ。菓子のヨマリはネワールのあいだで好んで食べられるだけでなく、ジャプと呼称されるネワールの農民カーストのアイデンティティに強くかかわっている。ジャプ・ディワースという国の祝日（一二月ごろ）は、ネワールのあいだでは「ヨマリ・プンニ（ヨマリの満月）」とよばれ、民族衣装を身に纏ったジャプの人びとが盛大なパレードで街を彩ることで知られる。

ヨマリ・プンニの日に、名物の巨大ヨマリを車にのせて巡行する人びと（2016年）

神話の話型と教訓

殺された身体（多くは女性や神）から食物が発生するという話型は、比較神話学で著名な民族学者イェンゼンによって、ハイヌヴェレ型と名づけられている。ドーンチョーレェチャの物語もこれが派生したものと考えられる。彼は世界中に分布するこのタイプの神話を研究し、果物や芋の栽培などの初期農耕や焼畑との関係を指摘した。イェンゼン著『殺された女神』を日本に紹介した大林太良は、日本の記紀神話にも女神の身体から食物が発生する類似例が見られることを挙げ、イネや小豆などの栽培作物の起源との関連に言及している。大林の弟子にあたる山田仁史は、『首狩の宗教民族学』（筑摩書房、二〇一五年）において台湾の焼畑農耕と首狩との関係を論じているが、農耕民のあいだで仇の頭骨が豊穣をもたらすと考えられていたことから、作物の生育のサイクルと、死と再生の観念は不可分な関係にあると述べている。物語をめぐる関心は、連綿と続く研究者の探究心を常に刺激し続けている。

さて、ドーンチョーレェチャの物語には続きがある。雌ヤギが死んだのち、ある日、プンクが木になったヨマリを食べていると、鬼の夫婦が来てさらわれてしまう。しかし、プンクは賢いネズミの助言により鬼から逃れ、さらに財宝も山ほど手に入れて生還する。プンクの成功を妬んだ継母は、じつの娘が鬼にさらわれるように仕込んだ。しかし、ネズミの助言を聞かなかった娘は鬼に喰われてしまい帰ってこなかった。愛娘を失った継母は「欲深くある限り罪の傷は癒えない」という諺を語り、自分のおこないを恥じたという結末だ。決してハッピーではない結末にも教訓がひそんでいる。

語り納めに見る書き手の想い

ネパールの民話の最後には、日本の昔話と同様に、語り納めのことばが添えられている。カルナーカル・ヴァイデェ著『カトマンドゥ盆地の民話』（ネワール語、マーンダス・スガットダス社、一九六四年）に収録されている「ドーンチョーレェチャの話」は、「話はここでおしまい。もう膝は突き合わせなくてよいですよ（足を崩してください）、素晴らしい話を聞いてくれましたからね」ということばで結ばれている。表紙には、おばあさんが子どもたちに物語を語っている様子が描かれ、民話のある日常をうかがい知ることができる。また、同著者の『ネパールの民間伝承集』（ネパール語、ラトナ・プスタック・バンダール社、一九六七年）では「聴いた者には金のマラ（首飾り）、語った者には花のマラ」とあり、物語を聴いたり語ったりすることが、知恵や功徳のように価値あるものであるかのように説かれている。

現代のネパールの子どもたちは、スマートフォンやタブレットを通じて外国語の動画に触れる機会の方が多いように思う。子ども時代におばあさんから昔話を聴くのが大好きだったという知人の女性は、わたしが古本屋で探してきた民話集を懐かしそうに手に取り、当時の様子を話してくれた。そのような民話のある家族の光景がまったくなくなったわけではない。だが、家族が集まってヨマリを作り、それを贈り合ったりするヨマリ・プンニの日に、ドーンチョーレェチャの物語を思い出すネワールの人はほとんどいないだろう。だからこそ、家族が集う大切な日に、民話がもっと活発に語られ、豊かな自国の文化に光が当てられる未来を願ってやまない。

菓子のヨマリ。口の部分が筒状のものと分岐したものの、ふたつのパターンがある（2013年）

秋野亥左牟『プンク マインチャ』©1968 福音館書店

ミンブレス土器を民話で解く

伊藤 敦規　民博 人類文明誌研究部

米国ニューメキシコ州の南西部に、スペイン語で「柳」を意味するミンブレスという地域がある。二〇一七年夏にこの山あいの土地を訪れることができた。しかも特別な人たちと一緒に。

ミンブレスの土器

米国南西部は、米国考古学におけるメッカのひとつである。出土する土器や遺構の特徴によって南西部の文化は三つに大別される。世界遺産のチャコ・キャニオンをはじめとする壮麗な遺構を多数有するアンセストラル・プエブロ（旧称アナサジ）文化、メジャーリーグ球団の冬季キャンプ地として有名なアリゾナ州都フィニックスを中心とするホホコム文化、そしてヒラ川とミンブレス川流域に形成されたミンブレス遺跡群をはじめとするもっとも広大な地域をカバーするモギヨン文化がそれぞれ魅力を放つ。

モギヨン文化を構成するミンブレスの名を世にとどろかせた要因のひとつは、自然現象をあらわしたと思われる幾何学模様をはじめ、他の遺跡ではほとんど出てこない、動物、昆虫、植物、そして当時の人間の営みなどを柔らかいタッチで生き生きと描いた土器が大量に発掘されたことである。この地域のおもな遺構は紀元二〇〇〜一三〇〇年ごろの竪穴式住居群跡で、その約一一〇〇年のあいだに作られた土器は、素材となった粘土やつなぎの成分、描かれた意匠などの特徴によって四つの時代に区分される。具象的なデザインが起こされた椀は、一〇〇〇年ごろから一一三〇年ごろに集中して作られた。そして、一三〇〇年ごろを境に竪穴式住居遺構自体がほとんど見られなくなる。ミンブレス文化は忽然と消えてしまったのだ。

ヒラ川上流の渓谷（2017年）

民話でつながったミンブレスとホピ

ミンブレス文化を担っていた人びとはどこへ行ったのか。その答えは考古学的にははっきりしていないが、彼らはおおむね複数の集団にわかれ、ニューメキシコ州中部から北部にかけて点在するプエブロ諸民族に合流したと考えられている。ミンブレスから北西五五〇キロメートルに暮らすホピにその一部が合流した可能性を指摘した人物もいた。ホピの画家、フレッド・カボーティである。

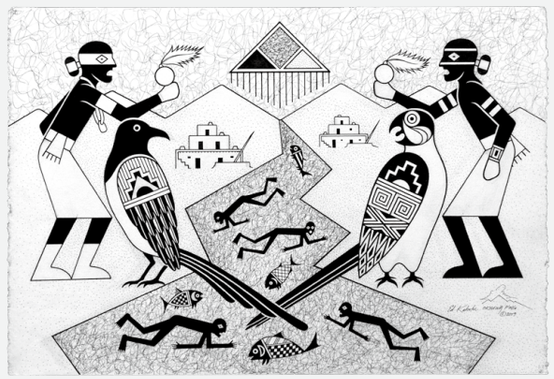
一九〇〇年生まれのフレッドは、地元でホピの伝統文化を学ぶ一方、都市サンタフェの寄宿学校に暮らすことでホピ以外の人びととの人脈も築き、若いころからアーティストとして才能を発揮した。一九三九年のサンフランシスコ万博にはアドバイザーとして携わり、ハーバード大学附属ピーバディ考古学・民族学博物館の発掘隊がホピ保留地にやって来た際には助手として参加した。そのときフレッドは、発掘隊の一員でミンブレスのスワーツ遺跡を発掘したコスグローブ夫妻から、一九三二年に出版された彼らの報告書を譲り受けた。

報告書を読んだフレッドは、そこに掲載されたミンブレス土器に魅了されながらも、「考古学者は意匠の真髄を理解していないのでは」という思いを抱くようになる。そして一九四一年、ニューヨーク近代美術館の「米国先住民アート」展に出品者としてかかわり、会場でミンブレス土器のインスタレーションを目の当たりにした彼は、その思いを強くし、サンフランシスコ万博の実行委員を務めたデンマン夫人にその疑問を吐露した。夫人の勧めもあり、グッゲンハイム記念財団の奨学金を得たフレッドは、コスグローブ夫妻の報告書をはじめ、さまざまな考古学者の研究書を参考にしながら、土器に描かれた意匠を模写していった。さらに、ホピの伝統的な生活の一場面や、ホピのいくつかのクラン（親族集団）が保持してきた民話の内容に類似する意匠に関して、ホピならではの解釈を加えていった。一九四九年に二五〇部限定で出版された『ミンブレス土器に関するホピの解釈』（グラブホーン・プレス社）には、彼が起こした三八画（第二版には四〇画）とともに、彼の記憶と経験に基づく主観的な解釈が添えられている。

民話に基づく創作

わたしがミンブレスの土地を訪れたとき、同行者がいた。この地で発掘調査をおこなう考古学者の荒川史康と五名のホピのアーティストである。わたしたちはここで、通称ミンブレス・ワークショップを開催した。七〇年前にフレッドがおこなった解釈を振り返り、それに倣いつつ、フレッドが叶えられなかった実物の土器の触察（三七点）をおこなうことができた。さらにこのワークショップには、ミンブレスの景観を肌で感じる現地実見プログラムも加えた。そして、五名のアーティストには、およそ一年後の完成を目指した作品制作を依頼した。熟覧した土器と、その熟覧をもとに創作した作品を併置するという展示計画があったためである。この「歴史を超えた聖なるつながり」展は、民博が協力機関となって、荒川が館長を務めるニューメキシコ州立大学附属博物館で二〇一九年春から冬にかけて開催された。そこでは、土器にまつわる民話の語りの映像も上映された。

あらたに創作された作品とそこに込められた現代の「もの語り」映像は、資料として博物館でも継承されていく。ミンブレス土器とそれにまつわる「もの語り」は、将来また別の人びとを引き寄せ、あらたな物語を紡いでいくだろう。



エド・カボーティ画《A Tewa Migration Story》2019年

本作は、フレッド・カボーティの孫、エド・カボーティがワークショップを経て制作したペン画。その後、民博に寄贈された（H0326404）。モチーフとなったのは彼の母方の親族の民族集団（カーポ・オウィンゲ、旧称サンタ・クララ・プエブロ）に伝わる民話である。かつて一族が半分に別れて各地を渡り歩いていた。あるとき、両者は再会を果たそうとしたが、濁流によって遮られてしまった。それぞれの半族の守護神的な存在であるカササギとオウムが尾羽根を重ね合い、荒ぶる川に橋を架けた。それを渡ることで半族の再会は叶ったのだが、それをよしと思わない呪術師が尾羽根の橋を崩落させてしまう。人びとは川に落ち、魚に姿を変えた

左：エドはミンブレス川を泳ぐ魚を目にして「あれはわたしの兄弟だ」と語った（2017年）

右：ミンブレス土器を熟覧するエド（ジェロニモ・スプリングス博物館、2017年）
左：作品を解説するエド。その様子は映像収録された（2019年）

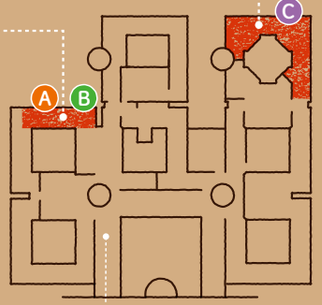
みんぱく回遊

展示にないものを展示にみる

―バルカン半島の文化を探る

上畑史（うえはたふみ）
民博 機関研究員

Ⓒ ドイラ（H0277530、ウズベキスタン）



テーブルクロス（H0086636、マケドニア）
データベースでみつけた標本資料。縁まわりにリボン型のモチーフを発見

Ⓐ ヨルダンの絨毯（H0229054）ほか
写真中央の模様がリボン型のモチーフ。バルカン半島のボスニア・ヘルツェゴヴィナでは「リボン」、アナトリア半島では「耳飾り」などとよばれる

Ⓑ 女性用頭飾り（H0228894、ベツレヘム）ほか

Hからはじまる番号は標本番号です。

民博の地域展示

民博の展示は入口からでも出口からでも入退場できるようになっているのだが、一応の順路も示されている。世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地域にわけ、オセアニアを出発して東回りに世界を一周し、最後に日本にたどり着く順路である。このように地理上の配置に沿った順路は、展示をみる者に余計な先入観を与えることを回避する。そして、こうした「地域展示」の区分には、日本にとっての異文化や非西洋世界だけでなく、世界の諸文化に独自性と価値を認める文化相対主義的なメッセージを読みとることができる。

ただ、この地域展示に収まりきらない文化もあるように思う。わたしが研究対象としている旧ユーゴスラヴィア諸国やバルカン半島の文化は、その一例だろう。ヨーロッパ大陸に位置する旧ユーゴ・バルカン地域は、もちろんヨーロッパ展示に含まれている。その一方で「東西文化の交差点」と表現される同地域が有してきた、西アジアのトルコや北アジアのロシアとの共通点は、みえづらくなっていると感じる。そして、旧ユーゴ・バルカン地域を贔屓目（ひいきめ）にみてしまいがちなわたしは、同地域に関する展示資料の数が少ないのではと思わずにはいられない。

だからといって諦めるのはまだ早い。展示ができるのは、世界中を網羅した展示資料の数と種類の多さのおかげである。

民博全体の活用

このように他の地域をみたり異文化を知ったりすることで、自分にとって身近な地域・文化のことをもっと知ることができる。これはまた、特定の民族や地域を特別視したにないものをいかに展示にみるのか。まるで禅問答だが、わたしなりに発見した方法を紹介したい。

通文化でみる地域展示

そのひとつは通文化的な見方である。じつのところ、これは地域展示と並び民博の展示構成の柱となっている「通文化展示」において提起されている。通文化展示は地域単位ではなく、特定のジャンルや共通テーマに基づき構成されたコーナーで、現在は言語と音楽が取り上げられている。ここでは、特定のモノの世界的な伝播（でんぱ）や文化を通じた地域間の繋（つな）がりを一望できる。

このような通文化的な見方を意識しながら地域展示をめぐってみると、わたしの研究対象地域に関して言えば、隣接するトルコやロシア以外の地域・民族との繋がりに気付かされる。たとえば、西アジア展示にあるヨルダンのテント内の絨毯（じゅうたん）に織り込まれたリボン型のモチーフや、ベツレヘムの女性用頭飾りのように民族衣装に硬貨を縫い付ける装飾などは、バルカン半島でもよくみられる。また、中央・北アジア展示にあるウズベキスタンのタンバリンに似た打楽器「ドイラ」は、バルカン半島では「ダイレ」という類似した名前でよばれている。このように、楽器の形状だけでなく名前の類似から、中央アジアとの共通点も見いだすことができる。もちろん、こうした発見り偏重したりする態度への警鐘ともなる。

それでもなおわたしのように、好きな国・地域の標本資料をもっとみたい！という人にさらにお勧めしたいのが、民博ホームページ内の「標本資料目録データベース」である。ここでは民博が所蔵する標本資料を検索・閲覧でき、わたしは恥ずかしながら、ここで旧ユーゴ関連の標本資料を二〇〇点近くもみることができるのを最近知った。インフォメーション・ゾーンにあるビデオテークの映像番組や館内の図書室も活用できる。

以上のように、誰もが世界への興味・関心を掘り下げられるさまざまな手段が用意されている。これこそ民博の展示の魅力であり民博の醍醐味（だいごみ）である。

リボン型モチーフをプリントしたベッドカバー。セルビアで購入（筆者蔵）

INFORMATION みんぱく インフォメーション

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第みんぱくホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申しあげます。

特別展

「ユニバーサル・ミュージアム ―さわる！〝触〟の大博覧会」

さわって体感できるアート作品が大集合！ 本展では「歴史にさわる」「風景にさわる」「音にさわる」などのテーマのもと、さまざまな素材と手法を用いて、〝触〟の可能性を追求します。展示場に足を運び、手を動かす。来館者一人一人の身体から「ユニバーサル・ミュージアム」（誰もが楽しめる博物館）が始まります。

会期　9月2日(木)～11月30日(火)
会場　特別展示館

厚みある時間（北川太郎）

みんぱく夏休みこどもワークショップ

「ドンドン・クンタクン！ダンボール太鼓で韓国のリズムを叩こう！」

日本のおとなりの国、韓国にはとても魅力的な太鼓のリズムがあることを知っていますか？ 今年の夏休みこどもワークショップはオンラインで開催し、ダンボール太鼓のキットを使って実際にリズムを叩きながら、韓国のお祭り文化について楽しく学びます。

日時　8月7日(土)11時～14時
（10時 zoomミーティングルーム開場／12時～13時 昼食休憩）
開催方法　オンライン会議システム（zoom使用）
講師　神野知恵（本館 特任助教・人文知コミュニケーター）
チェ・ジェチョル（韓国打楽器奏者）
対象　小学4年生～6年生
参加費　無料
参加条件
・パソコン等機器（音声・カメラ付き）と通信環境があり、zoomアプリケーションが使用可能のこと（未経験の方には zoomマニュアルを配布）。
・zoom画面の録画を行い、一部をホームページや学会発表で公開する予定のため、肖像権利用について許諾できること。
・ダンボール太鼓を叩くワークショップであるため、音を出せる環境で受講できること。
定員　6組
応募方法　申込フォームにて事前申込制（先着順）
【応募期間】
7月14日(水)10時～7月28日(水)17時（定員になり次第締め切り）

バーチャルミュージアムのご紹介

各展示場の様子をさまざまな角度から見ることができるパノラマムービーを公開しています。ご自宅から、パソコンやスマートフォン、タブレットで展示場をご覧いただけます。本館展示場のほか、過去の企画展等も一部公開しています。
https://www.minpaku.ac.jp/exhibition/permanent/panorama

バーチャルミュージアム

YouTube公式チャンネルのご紹介

展示紹介動画のほか、オンライン配信した過去のイベント動画を掲載しています。
https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial

巡回展

「子ども／おもちゃの博覧会」

本展は、平成31年3月～5月に本館で開催した特別展「子ども／おもちゃの博覧会」を、島根県立古代出雲歴史博物館（島根県出雲市）において、巡回展として開催するものです。大人とは異なる存在としての近代日本における「子ども」の誕生を、子どもに関する玩具を始めとした様々な生活用品などのモノの展示を通して明らかにします。

会期　7月2日(金)～8月22日(日)
会場　島根県立古代出雲歴史博物館 特別展示室
開館時間　9時～18時（入館は17時30分まで）
休館日　7月27日(火)・8月17日(火)
観覧料　一般1000円、大学生500円、小中高生300円
主催　島根県立古代出雲歴史博物館
共催　国立民族学博物館
協力　一般財団法人日本玩具文化財団、公益財団法人千里文化財団
後援　島根県内マスコミ（19社）

刊行物紹介

■江口 一久 編
八木 祐子、手塚 恵子 編集
『儀礼と口頭伝承』
風響社　5,500円(税込)
モンゴル、インド、スリランカ、中国、韓国、日本など、アジア各地の事例を読み解き、変動する社会における文化の創造とパフォーマンスを考察。（民博「アジア・太平洋地域における民族文化の比較研究」第9回シンポジウムの成果）

■卯田 宗平 編
『野生性と人類の論理 ―ポスト・ドメスティケーションを捉える4つの思考』
東京大学出版会　8,580円(税込)
本書は人類にとって動植物の野生性とは何かを問うたものである。本書では、養蜂や鷹狩り、狩猟、鵜飼、水田植物、タケなどに注目し、人類社会と動植物の野生性とのかかわりを4つに類型化することで新たな解釈枠組みを示した。

みんぱくゼミナール

第511回
7月17日(土)13時30分～15時(13時開場)
参加形式　オンライン(ライブ配信)のみ（定員300名）

人はなぜ共に歌うのか？ ―インド北東部ナガの伝統ポリフォニーの事例から

講師　岡田恵美(本館 准教授)
インド北東部の山岳民族ナガは、稀少な伝統合唱文化を伝承しています。棚田での農作業では自然と声を重ね、相互扶助の精神が歌の中に息づいています。人はなぜ共に歌うのか、この根源的な問いを取り上げます。

【申込期間】
■一般受付　7月14日(水)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。
※オンラインのみでの開催となり、会場(本館講堂)での開催はございません。

チャケサン・ナガの小学生と一絃琴タティ

第512回
8月21日(土)13時30分～15時(13時開場)
参加形式　会場　本館講堂(定員160名)
オンライン(ライブ配信)（定員300名）

規則的配色がつくりだす宗教空間 ―敦煌莫高窟の千仏壁画

講師　末森薫(本館 助教)
古代シルクロードを代表する敦煌莫高窟の洞窟は、小さな仏を並べた千仏壁画で彩られています。千仏壁画の規則的配色がつくりだす視覚的特徴は、宗教空間をつくる上で欠かせないものでした。

【申込期間】
■友の会(維持会員・正会員)
電話先行予約
7月12日(月)～7月16日(金)
■一般受付
7月19日(月)～8月18日(水)

彩色を再現した莫高窟の千仏壁画

ゼミナールの参加について
・要事前申込、先着順、参加無料
（展示をご覧になる方は要展示観覧券）
・本人を含む2名まで(会場参加のみ)
・会場参加の方には入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布します。

【申込方法】
■ 友の会(維持会員・正会員)電話先行予約（定員30名）
【申込先】千里文化財団友の会事務局
電話 06-6877-8893
(9時～17時、土日祝を除く)
※先行予約は会場でのご参加が対象です。
■ 一般受付
・オンライン予約
みんぱくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。
・当日参加申込(会場参加のみ、定員30名)
11時から本館2階講堂前にて受け付けます。

イベント予約サイト
https://www.minpaku.ac.jp/event/lecture/seminar

各イベントについてくわしくは、みんぱくホームページをご覧ください。

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form

友の会

友の会講演会

当面のあいだ、友の会会員に限定して開催します(要事前申込、先着順)。受付フォームは友の会ホームページ内にあります。

第514回 7月3日(土)13時30分～14時40分

河西回廊の石窟寺院と美術

講師　末森薫(本館 助教)
インドで誕生した仏教は、陸路、海路で各地に伝播していきました。北伝仏教が伝わった中国北西部の河西回廊沿いには、像や壁画で荘厳された石窟寺院が数多く残されています。本講演では、南北朝時代に開かれた敦煌莫高窟と天水麦積山石窟を中心に、石窟寺院の空間やそれを彩る美術より仏教伝播の諸相を探ります。

参加形式
オンライン(ライブ配信)のみ(定員100名)
※受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/514tomo/

第515回　8月7日(土)13時30分～14時40分

呪術を理解する ―ヴァヌアツの邪術をめぐって

講師　白川千尋(大阪大学 教授)
呪術とは、科学的な理解を超えた存在や力に働きかけることで、特定の目的を達成しようとする行為や知識を指します。占いや厄払いなど私たちの身近にも珍しくありませんが、今回の講演会では南太平洋のヴァヌアツ共和国の邪術(不幸にかかわる呪術)を取りあげます。また、邪術や呪術をめぐる文化人類学者の理解のあり方についても考えます。

参加形式
①本館第5セミナー室(定員40名)
②オンライン(ライブ配信)(定員100名)
※受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/515tomo/

みんぱく友の会オンラインレクチャー

友の会ホームページでミニレクチャー動画を公開中です。

なぜ古代文明の建物は大きいのか ―南米アンデス文明からの視点

講師　関雄二(本館 副館長)
世界の古代文明に共通するのは、巨大な建物、いわゆるモニュメントを築いたことです。その理由、そして大きくなったことにより、社会がどのように変貌したかについて、南米アンデス文明を例に解説したいと思います。
※公開ページ
https://www.senri-f.or.jp/tomomovie004/

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会（千里文化財団）
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

○○してみました世界のフィールド

ムンバイのムスリム聖者廟

真下 裕之（ました ひろゆき）
神戸大学大学院教授

わたしは外国の歴史を研究しているくせに外に出るのは好きでない。だから学生のころ、歴史を研究するには「史料」という種類の本を読めと教えられて少しほっとした。やってみるとたしかに、出来事の現場に行ったことがないのになぜか論文は書ける。とはいえ、あのときの安心と納得の後ろをとおりすぎた暗い疑念がきえたわけではない。本当のところ、歴史は本のなかにあるのだろうか。

参道の露店（撮影：二宮文子、2008年）

海上の墓廟

こんな出不精にもかかわらず、ムンバイに頻繁に出かけた時期がある。インド・イスラームの歴史研究に役立つ史料を、そこの図書館で調べるためだ。だから図書館が閉まる休日にはやることがない。そんなとき暇つぶしに幾度か出かけたのがムスリム聖者ハージー・アリーのダルガー（墓廟）だった。

ムンバイ中心部のフォート地区から北に約八キロメートルのところに、インド洋をのぞむマハーラクシュミーという地区がある。有名なヒンドゥー教寺院に因（ちな）んだ地名だが、その寺院の近くに、海岸へと続く狭い通路があることは、そこに押し寄せる人波が教えてくれる。

通路の脇でお供えの花やお菓子、飾り布をやかましく売り込んでくる露店の前を進むと、浅瀬に築かれた歩道の先、沖合の岩礁に鎮座する建物が見えてくる。満潮時に海水が洗うこの危うい参道には、打ちよせる波が飛沫（しぶき）を上げて、行き交う参拝客に降りかかる。暑気のなか立ちのぼる生暖かい潮の匂いを吸いながら、三〇〇メートル余り進むとダルガーの区画に行き着く。

コンペイトウのようなお供え菓子（2007年）

聖者のお墓にお参りしてみました

ダルガーにつづく参道（2007年）

あっという間の参拝

その区画は一辺が六〇メートル程度の方形で、ハージー・アリーの墓石は、ささやかなドームつきの建物のなかにある。墓石に宿る聖者の霊力にあやかろうと参拝客が続々やってくるのだが、額にビンディーを付けたヒンドゥー教徒もたくさんいて、どうもその御利益はムスリムだけに限られないらしい。不信心な仏教徒である筆者も参拝客の一人であるわけだが、境内では頭をハンカチで覆う程度の配慮ですむ。

混み合うドームの下に安置された墓石は、奉納された色とりどりの布に覆われていた。露店で買ったお供え菓子の袋を墓守の一人に手渡すと名前を訊（き）かれた。墓守は袋の封を切って、何かを唱えながら、お菓子を墓石に振りまいた。ドームに響く喧噪（けんそう）でよく聞き取れなかったが、どうやら彼はわたしの名前を聖者の霊力につないでくれたらしい。そして残ったお菓子の袋を返してよこした。「これどうするんだ？」と訊いたら「食え」と言う。なるほどお下がりかと納得する間もなく、儀式はきわめて事務的に次の参拝客に移っていった。

史料にない古い聖者

ハージー・アリーの歴史ははっきりしない。ダルガー管理委員会の公式ホームページによると、彼は「数百年前」にムンバイに渡来したイラン人で、イスラームの教えを広めるために定住したという。死の間際、彼は弟子たちに自分の遺骸を海に投じるように、そして遺骸が流れ着いた場所に墓を建てるように命じた。その場所こそ、ダルガーの岩礁だったというわけである。一方、別の言い伝えによると彼は数百年前の裕福な商人で、メッカに向かう途中で遭難したが、その信心ゆえに遺骸は故郷ムンバイのこの岩礁に流れ着いたのだという。

ところが史料には、ムンバイで数百年前に活動したというハージー・アリーなる人物の記録は見あたらない。この墓廟そのものも、一九世紀前半の案内書や古地図には記載されていない。つまりハージー・アリーという古い聖者の歴史は、一九世紀半ば、近代都市ムンバイが急速に発展する時代にはじめて浮上してきたことになる。

ハージー・アリーのダルガー（2007年）

ムンバイの歴史とハージー・アリー

ムンバイにはハージー・アリーのように近代になって出現したムスリム聖者たちの墓廟がほかにも多数ある。その背景には、商工業が発展したこの都市にインド国内外からさまざまな出自のムスリムたちが来住していた状況がある。そして彼らの出自を物語る歴史は、彼らが各々たてまつる聖者たちの歴史に重ね合わされた。

また当初のハージー・アリーの御利益が海上交通の安全だったことは、一九世紀半ばに活発化するインド洋航路の状況とも無縁ではない。

ハージー・アリーが歴史上実在したことの証拠はない。しかし、たとえ史料から裏付けられない歴史だとしても、彼が生きたと信じられてきた事実はムンバイの歴史の確かな一部であり、そう信じられて不思議でない状況にムンバイがあったことも史実である。

ダルガーを訪れる人の群れは、ハージー・アリーの存在感そのものだ。本に出てこないハージー・アリーの歴史は虚構であると断じてよいものか。本当のところ、歴史は本のなかにあるのだろうか。結局この疑念はきえない。

ダルガー内部。墓守の背後に墓石の天蓋の一部が見える（撮影：二宮文子、2008年）

バスケタリーをはぐくむ村落景観

小坂 康之
京都大学大学院准教授

豊かな自然や水源に恵まれ、水稲耕作が盛んな村で暮らすアパタニは、肥沃な土地を自らの手で緻密に管理してきた。この土地利用の産物ともいえるバスケタリーは、今や彼らの生活に欠かせないものとなっている。

編み組みに囲まれた生活

アパタニの人びとは、インド北東部アルナーチャル・プラデーシュ州の標高約一六〇〇メートルの小さな盆地に集住してきた。村落には、高さ一・五メートルほどのシイ材の柱で支えられた高床式の家が密に並ぶ。切妻造りの妻側にあるマツ材の戸を開けてなかに入ると、タケの稈を割り開いてラタンで縛った床が弾む。居間の中央の囲炉裏の上の屋根タケやマツがくべられている。囲炉裏の上の屋根裏部屋には、荷物の運搬や穀類の貯蔵などで使う、タケとラタンで編んださまざまなカゴが置かれている。タケを網代編みした壁には、ラタン製の背負いカゴ、タケ製の鞘におさめられた山刀などがかけられている。囲炉裏の周りに敷かれたヨシ製のゴザに座って、竹筒で蒸し焼きにした料理をいただいた。水田でとれたウルチ米とコイ科の魚に、発酵させたタケノコとトウガラシを加え、ヨシの灰と野菜と肉から作った食塩代替物で味付けられていた。

素材の入手

アパタニのバスケタリーでもっとも多く使われる植物素材はタケである。そのため多くの世帯は、集落の脇に竹林をもっている。下草がきれいに刈られた竹林には、マダケの仲間（*Phyllostachys mannii*）が植えられている。このタケは温帯に生育する種類で、日本のマダケと同様に稈が分散して生育する。稈がまっすぐで刺がなく加工しやすいため、林地に別種のタケが自生するにもかかわらず、アパタニはこのタケをわざわざ栽培する。稈がバスケタリーの素材となるだけでなく、タケノコは重要な食料であり、家畜がタケノコを食べないように、竹林は竹穂垣で囲われている。竹林の管理やバスケタリーの製作は男性がおこなうことが多い。

薪や農具をタケ製のカゴで運搬するアパタニの女性。カゴは紐を前頭にかけ、背中で支えて使用する（2011年）

興味深いことに、このタケは同州ではアパタニの村落付近にしか生育していない。伝承によると、数百年前に先祖がチベット方面からこの地に移住したとき、このタケを持ってきた。一般的にタケは数十年から百数十年に一度、開花して枯死するが、アパタニのタケはこれまでに一度も開花したことがないという。

アパタニのバスケタリーでは、縁の補強や結束にラタンが用いられる。しかしアパタニの村落だけでは、十分なラタンを確保できない。ラタンが多く生育する熱帯林帯は、ニシの人びとの生活圏である。同州でもっとも人口が多いニシは、アパタニが集住する盆地の周囲に広く居住し、おもに焼畑耕作や林産物採集に従事している。ニシのなかには、焼畑が不作のときなどに、身代金目的で豊かなアパタニを誘拐する人がいた。しかしニシは、アパタニにとって重要なパートナーでもある。アパタニはニシの友人に米や食塩代替物を贈り、代わりにラタンをゆずってもらったり、狭い村落では飼育できない家畜を預かってもらう。

ヒマラヤゴヨウマツの植林地に囲まれた水田。畦はきれいに除草されシコクビエが栽培される（2009年）

精緻な土地利用

アパタニの豊かさは、精緻な土地利用の賜物である。水田では主食の米を生産するとともに、コイ科の魚を養殖する。また畦をきれいに除草し、酒の原料となるシコクビエを栽培する。水田の周囲には、上述のマダケの仲間とともに先祖がこの地に伝えたとされるヒマラヤゴヨウマツ、スモモ、ナシ、リンゴが植えられる。庭園のように管理されたアパタニの村落景観は、焼畑休閑林に囲まれたニシの村落と対照的である。同州政府は、アパタニの村落景観をユネスコの世界文化遺産に登録すべく、二〇一九年に準備組織を設立した。

最近アパタニのなかには、就業や就学のために故郷を離れて町に暮らす人が増えた。しかし町のコンクリート住宅に不満で、庭にタケ製の別棟を建てて居間や台所として利用する人もいる。プラスチック製の日用品が普及しても、バスケタリーや儀礼祭祀の道具にはタケが好んで用いられる。タケ材を自給するために、町に住む人も頻繁に故郷に帰り、竹林の手入れを欠かさない。アパタニのバスケタリーは、精緻に織りなされた村落景観にはぐくまれた作品なのである。

居間の中央に設置された囲炉裏とヨシ製のゴザ（2010年）

タケを多用した切妻造りのアパタニの家屋（2010年）

シネ倶楽部M

映画の好みも多様なインド

山下博司 東北大学名誉教授
岡光信子 中央大学客員研究員

「ピンク」

原題：पिंक
2016年／インド／ヒンディー語／136分／DVDなし
監督：アニルッダ・ロイ・チョードゥリー
出演：アミターブ・バッチャン、タープシー・パンヌ、キールティ・クルハーリーほか

「ネールコンダ・パールヴァイ」

原題：நேர்கொண்ட பார்வை
2019年／インド／タミル語／158分／日本での公開なし
監督：H.ヴィノート
出演：アジット・クマール、シュラッダー・シュリーナートほか

「ネールコンダ・パールヴァイ」の上映館に据えられた看板（画像2点とも。どちらも2019年撮影）

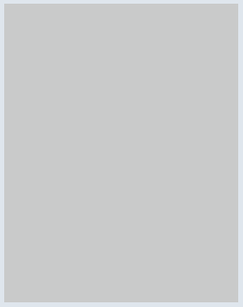
女性へのまなざしを問いただす作品

「ピンク」（二〇一六年、ヒンディー語）は、女性が「ノー」と言う権利をもつことを法廷ドラマに託して訴えた作品である。映画は、ハリヤーナー州の一都市で、顔じゅう血だらけになった若者・ラージヴィールが友人二人に付き添われて病院にやってくるところから始まる。警察に被害届を出すことを勧められるが、彼らはかたくなにそれを拒むのだった。

そのころ、自活しながら共同生活をいとなむミーナルら若い女性三人が、タクシーで家路を急いでいる。三人の取り乱した様子は、なんらかの異常事態が起こったことをうかがわせている。ある日、公園で日課のランニングをするミーナルを、ベンチに腰かけた一人の老人ディーパクがじっと見つめていた。彼は弁護士で、彼女の異変を直感したのである。女性三人は、ラージヴィールの友人から脅迫をうけ、警察に被害届を出す。数日後、ミーナルはラージヴィールの訴えにより売春と殺人未遂で逮捕される。弁護士ディーパクは、老骨に鞭打って、ミーナルの保釈手続きと裁判での弁護を買って出る。

法廷の審理で事件当日の様子が明かされていく。コンサートで出会った男女六人が、ホテルで夕食と飲酒を楽しんだあと、酔いが回ったラージヴィールが、レイプしようとミーナルに襲いかかった。彼女は抵抗し、彼の頭を酒瓶で思いきり殴打したのだ。ラージヴィールは大けがを負うが、ミーナルの行為は正当防衛だったことになる。ラージヴィール側の弁護士は、彼女たちの身もちの悪さを執拗に攻撃する。一方のディーパクは、一人暮らしで、酒をたしなみ、帰宅が遅くなりがちな女性に売春婦の烙印を押したがる世間の風潮に疑問を投げる。彼は、女性が望まないことを強要されたとき「ノー」を言う権利があること、「ノー」は「ノー」であって、それ以外の何ものでもないことを力説する。双方の主張は真っ向から対立する。裁判官はミーナルの証言を事実と認定するのか、それとも……。

「ピンク」は、インド女性への差別と権利をテーマに据えた社会派映画だが、主演でディーパク役のアミターブ・バッチャンの人気に加え、女性への社会的抑圧を真正面から取り上げたことが共感を呼び、大ヒットを記録した。



筆者がインドネシアで購入した「ピンク」のDVD。インドネシアにもインド映画ファンは多い

文化風土の違いがコンテンツの違いに

この作品は南インドのタミル語でリメークされている。タイトルは「ネールコンダ・パールヴァイ」。直訳すれば「直視するまなざし」となる。この映画は、二〇一九年に南インドのタミルナードゥ州などで公開され、原作品に劣らない興行収入をあげた。リメーク作品では、アジットというタミル映画の大スターが老弁護士役を演じた。筋書きはほとんど同じだが、大きな違いは弁護士とギャングとの格闘シーンの存在である。アジットは悪と闘う強いヒーロー像が定番で、観客は彼が悪漢を次々になぎ倒すシーンを期待して映画館に足を運ぶ。我々はこの作品をチェンナイの映画館で鑑賞したのだが、男性客が多かったのが強く印象に残っている。

アジットも四〇代後半に入り、従来のイメージから脱して新境地を拓きたいという願いから出演を決めたという。しかし、強いヒーロー像を望む観客の期待を裏切ることができず、呼び物の格闘シーンを加えざるを得なかった。インドは多文化・多言語の国で地域差が大きい。映画の好みも一様でない。原作は同じでも、地域ごとに文化風土が異なるため、それが映画のコンテンツの違いに反映されるのである。

「ネールコンダ・パールヴァイ」の上映館のロビーで、幕間（休憩時間）にくつろぐ人びと（2019年撮影）

ことばの迷い道

「ご健勝を」のキャッチボール

樫永 真佐夫（かしながまさお）
民博 超域フィールド科学研究部

黒タイはベトナム西北部から北ラオスにかけての山間盆地で、灌漑（かんがい）水田耕作を主生業として暮らしているタイ系言語集団である。長年その人たちとかかわり合ってきて、いささかチグハグ感を拭いきれないまま使い続けている社交表現がある。「ハオ・ハン」という表現。ことばどおりには「強健な」という意味だ。

では「ハオ・ハン」はどのような場面で用いられるのだろうか。

たとえば、祝賀、出会い、別れ、お礼などの改まったあいさつのとき、宴席で杯を交わし合うとき、折悪く会えなかった人へよろしく伝えてもらいたいときなどである。いつも顔を合わせている者同士がふだん使いすることばではない。多少なりとも改まった場で、相手に対する敬意を込めたオトナのことばなのだ。

それなら「ご健勝を」くらいのニュアンスで理解しておけば、場にふさわしくないわけではなかろう。無論その解釈に不服はない。だから、わたしがチグハグに感じてしまうのは、妙によそ行きの態度で「ご健勝を」と慎ましやかに言い合う状況や、「強健な」という意味にそぐわない間延びした柔和な音の響きゆえのような気がする。

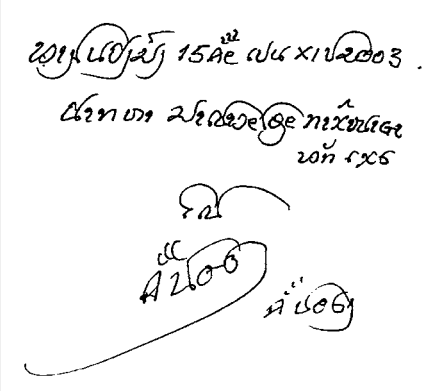
言い合う、と述べたが、それが重要な点で、「ハオ・ハン」は双方向的に用いられる。つまりこのことばを投げかけられた人は「ハオ・ハン」返しをするのが礼儀である。「ハオ・ハン」のキャッチボールが人と人のつながりを緊密にし、あるいは緊密に保つのだ。そう考えると、なんだか黒タイ社会のトロンとゆるい人間関係を作り出す核に、このことばがあるような気さえしてきた。

かつて黒タイ語とベトナム語で刊行した拙著を、黒タイ文字の読み書きにも精通しているベトナムのある民族学者に献本したときのことである。本の扉の内側に、わたしは黒タイ文字でサインし、献辞に「ハオ・ハン」と書き添えた。先生は微笑んで、たしかベトナム語でおっしゃった。

「日本語のサインもくれないか。ベトナム語や黒タイ語ではありがたみがたりないんだ」

何千万何億の人が読み書きする文字よりも、ごく少数の人にしか用いられていないローカルな文字の方が秘儀的でカッコいい。わたしはそう思っていたからガッカリした。だが西暦2000年代のベトナムで、ローカルさとは鈍くさいものでしかなかったのだ。

仰せのとおり日本語でのサインを書き加えたが、「ご健勝を」とは書かなかった。



黒タイ文字のサインと献辞（2003年4月15日）

『月刊みんぱく』は
国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（平日9：00〜17：00）
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく　2021年7月号

第45巻第7号通巻第526号　2021年7月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　園田直子
編集委員　三島禎子（編集長）　池谷和信　上羽陽子
岡田恵美　齋藤晃　吉岡乾
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、再生産可能な大豆油由来のインク、環境に配慮したFSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス紙 FSC® C013678

VEGETABLE OIL INK

月刊みんぱく

2021年
7月号

編集後記

初期の万国博覧会が欧米諸国による国力誇示と植民地支配の正当化をともなっていたことは、民族文化の展示をおこなう博物館の誕生と無関係ではない。万国博覧会に附属してオリンピックが開催された時代もあった。そのオリンピックも平和の祭典という理想を掲げつつ、テロ事件、冷戦下におけるボイコット合戦などの影響を被ったり、ヒトラー政権下で政治的に利用されたり、人種差別を訴えたり、逆に差別の場となった歴史がある。近年ではオリンピックの巨大化と財政負担、商業主義、ドーピングなどの問題が浮上している。そうしてみると、コロナ禍におけるオリンピックの開催の有無は、歴史上どのような性格を与えられるのか注意深く見極めてゆく必要がある。

さて今月号から誌面のリニューアルをおこないデザインを一新した『月刊みんぱく』になった。編集長も新米ほやほやである。各コーナーは従来どおりだが、色使いやレイアウトで文字の読みやすさを工夫するとともに、原材料には環境に配慮したものを使用している。読者のみなさんには長く手元に置いておいていただきたいが、個人的にはミミズコンポストに入れても安全な雑誌が望ましいと思っている。（三島禎子）

次号の予告 8月号

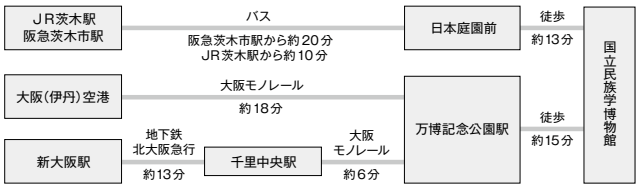
特集「**大学のみんぱく活用術**」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151
開館時間　10:00〜17:00（入館は16:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は翌日が休館日）
年末年始（12月28日〜1月4日）

主要ターミナルからのアクセス

当館までの交通手段はいくつか方法がありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

1年間お届けします！

『月刊みんぱく』定期購読のご案内

みんぱくの広報誌『月刊みんぱく』では、催しの情報のほか、世界各地の文化、衣食住の生活用品の展示、最新の民族学、文化人類学の研究について、研究者が親しみやすいエッセイやコラムで、毎月紹介しています。定期購読は年間をとおしていつでも始められます。今号からデザインを一新し、さらに読みやすい誌面になりました。ぜひこの機会に定期購読を始めてみませんか?

定期購読料：4,400円（発送手数料込）

こちらもオススメ!

『月刊みんぱく』が毎月届くほか、年間何度でも本館展示をお楽しみいただけるミュージアム会員へのご登録もおすすめです。

ミュージアム会員…5,000円（年会費）

お問い合わせ

定期購読、友の会のご利用は、国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（平日 9:00 ～ 17:00）　minpakutomo@senri-f.or.jp